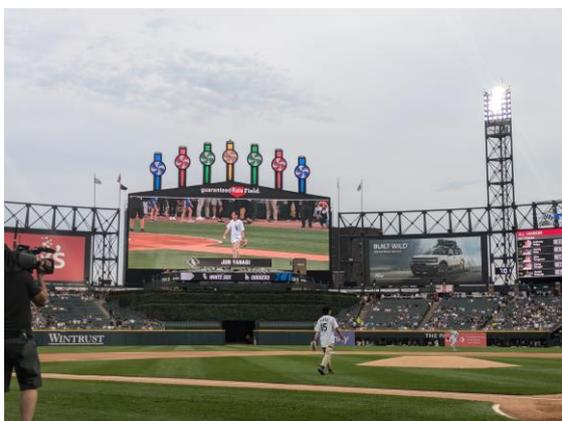


2024年6月30日

6月25日、シカゴ・ホワイトソックスのホーム球場ギャランティード・レート・フィールドのマウンドにのぼった。背番号は2005年ワールド・シリーズ優勝に貢献した井口資仁選手がつけていた15番。相手はロサンゼルス・ドジャース。始球式直後に、大谷翔平選手の先頭打者ホームランが飛び出した。ちなみに、四半世紀前、米国公式訪問の際にシカゴを訪問した小淵総理（当時）は、カブス戦でサミー・ソーサ選手相手に始球式を行ったという。



1 西部ネブラスカ ～ 独自の日系人の歩み

1928年から2018年まで、ネブラスカ西部で日本人移民・日系人コミュニティの集会所であった「ジャパニーズ・ホール」。近隣の「草原の遺産博物館」の敷地内に移築され、日本人移民と日系人の歴史を発信・伝承する博物館として6月8日にグランド・オープンした。

1890年代後半から1900年代前半にかけて、ネブラスカ西部に到来した日本人移民は、鉄道工事や農業（テンサイ栽培）に貢献した。家族や親族への送金義務を果たした後、悩んだかもしれないが、米国での幸せを夢見て残留することを決断した日本人。この地の日系人は強制収容の対象とならなかったこともあり、西海岸やシカゴとは異なる独自の歴史を辿った。リーダー的存在で、白人からも尊敬を集め、民主党大統領候補となったブライアン国務長官とも親交を結んだ加納久典牧師（同人自身は強制収容された）。日系人が長年営んできた地元の有名洋食店イーグルカフェ。展示からいろいろ学べる。

式典と一連のイベントに参加し、この地の豊かな文化と自然に触れ、地元の人々の暖かい歓迎を受けた。100年以上前に、この地に移住してきた日本人も、同様に暖かい歓迎とおもてなしを受け、この地を心地よく思い、残留を決断したのだろうか。このプロジェクトの推進者であるサクラダ氏の、支援者をまとめ上げてきたエネルギーにも圧倒されるが、この地に移住してきた彼女の祖先達も、同様にエネルギーに満ち溢れていたに違いない。

開所式にはピレン知事をはじめ約200名、夕食会には約400名が参加。州内各地は勿論、ハワイを含め米国各地からも支援者が駆け付けた。大勢が一堂に再会している一族も見られた。「ジャパニーズ・ホール」が、日系人の歴史と遺産を継承していくだけではなく、日系人が集う求心力を持つ場としても、そして、日本文化の発信拠点にもなっていくことを願う。

余談だが、西ネブラスカには、州東端の最大都市オマハからの航空便がない。そこで、コロラド州デーパーまで飛び、そこから陸路3時間かけ移動した。真っ平らなトウモロコシ畑の中を直線道路が延々と続く中西部とは異なり、山岳部時間帯の風景は変化に富む。管轄地域の大地と風土、そこで営まれてきた文化と産業、そこで生活する人々の深層風景と政治的傾向に思いを巡らせるためにも、飛行機移動だけではなく、自動車で行ってみることが必要だ。



ピレン知事（中央）



サクラダ氏と知事



当時の演劇の垂れ幕

2 キッコーマン新工場地鎮祭 ～ 次の50年に向けて

昨年50周年を迎えたキッコーマン・ウォルワース工場に次ぐウィスコンシン州2カ所目のジェファソン新工場の地鎮祭（グラウンド・ブレイキング）が6月12日行われた。全米の64カ所の候補地を精査し、最終的にジェファソンに決めた要因は、50年前にウォルワースを選定した時と同じという。醤油生産に必要な大豆・小麦・良質な水資源。製品を全米各地に配送するのに

適した地理的位置とロジステック。そして何よりも同州の良質な人材と地元の温かな歓迎。

日本から茂木友三郎名誉会長、堀切会長、茂木専務御夫妻などが、州側からはイーヴァス知事（民主党）夫妻、トンプソン元知事（共和党）、郡・市長などが列席。双方の高い期待と感謝と同時に、日米関係の基礎にある、長年の州レベルにおけるビジネスパートナーシップと人的交流により培われてきた信頼友好関係を象徴的に示す式典であった。

キッコーマンのウィスコンシン州進出は、現在の日米経済パートナーシップを構築する「グラウンド・ブレイキング」の役割を果たした。当時は、地元住民からの反対や懸念の声もあったが、当時の州知事が自ら町民集会に出席し「キッコーマンは我が州に相応しい企業」と発言してくれたという。

50年以上の創業の実績と信頼と評価を得て、今回はそのような反対や懸念の声は聞こえない。昨年12月にウォルワース工場を視察させて頂いた際、従業員が5年毎に工場側に記念品を贈呈しているとお聞きし、感銘を受けた。後続した日系企業にとって「よき企業市民として地元と共存共栄する」「米国企業になりきる」ロールモデルだ。トンプソン知事時代の1990年に締結された千葉県（キッコーマン発祥の地）との姉妹県州関係も、経済パートナーシップと人的交流との間に存在する好循環の一例と言える。

改めて、茂木名誉会長が、海外展開という御自身の人生における「本懐」において、「越えるためにある国境」を越えられたことに深甚な敬意を表したい。



シャベルでの起工式

茂木名誉会長・知事夫妻・元知事御家族と本官夫妻

3 夏休み前、行事が続く6月

6月13日、シカゴ日米協会の94周年記念年次ディナーが開催された。今回、16年間にわたり事務局長として協会の運営を切り盛りしてきた馬場光國氏が事務局長職を勇退すること、そして7月1日付で日系人のマリオン・フライバス・フラマン女史が新事務局長に就任することが発表された。馬場氏は、その功績により外務大臣表彰を既に受賞されているが、改めて16年間にわたり日米協会を支えてきたことに対して感謝の意を表したい。

6月16日、真夏の陽光きらめく中、「シカゴ日本祭」がダウンタウンのミレニアムパークで開催された。日本伝統文化（生け花、茶道、琴など）からJポップ・アニメ、武道（剣道、空手、合気道など）、各団体や日系企業のブース、和菓子やそば打ちのデモンストレーションから日本食の屋台まで、盛り上がっていた。祭りには人々を結びつける力がある。様々な日本人関連、日系人関連、日米関係関連の団体と人々が「祭りを成功させて皆で楽しもう」との共通の思いの下で結集し、連帯感を一層強めていた。そして、市内一等地の屋外開催により、普段は日本とは関係のないシカゴ市民や観光客が多く立ち寄る結果に。規模も集客も、シカゴ圏における日系団体イベントとしては最大規模。企画運営の中心になった方々、多くの参画者、ボランティアの方々、スポンサー企業などに対して、改めて御礼を申し上げたい。

同じ週末開催された柔道関連のイベントでは、五輪メダリストの羽賀龍之介選手（旭化成）も駆けつけた中で、「闘魂柔道アカデミー」会長のダグラス・トーノ会長に外務大臣表彰を授与する機会を頂いた。トーノ会長は1992年にシカゴで柔道教室を開設以降、柔道の普及に大いに貢献してきた。女性柔道家の石川慈さん（元アジア選手権優勝者）が主催する子供を対象とした講習会も行われた。米国の子供たちが、柔道を通じて、日本への関心を高め、精神力を鍛え、他人に対する礼儀作法や敬意を学ぶことを期待している。



勇退する馬場事務局長



日本祭



トーノ会長に対する外務大臣表彰